

学会報告：国際シュライアマハー学会
(Internationaler Schleiermacher-Kongress)

岡田勇督

【概要】

ドイツ中が宗教改革 500 周年という記念すべき年を祝うなか、ルターにもゆかりのあるザクセン・アンハルト州のハレにおいて、2017年3月5日から8日、国際シュライアマハー学会が開催された。本学会はシュライアマハー協会(Schleiermacher-Gesellschaft)によって数年に一度のペースで開催されているが、同協会のホームページによれば(<http://schleiermacher-gesellschaft.theologie.uni-halle.de/de/>、2017年3月13日アクセス)、「1996年に設立されたシュライアマハー協会は、フリードリヒ・ダニエル・エルンスト・シュライアマハーの著作に対する学問的な取り組みのために設けられ」ており、「彼の宗教理論、文化理論、近代の理論にかんする考察と実践的改革の提案は、新プロテスタントの理解に決定的な影響を与え」ていることに鑑みて、このような大規模の学会から地域レベルの小さな研究グループに到るまで活発に活動を進めている。2017年の今年も宗教改革記念にふさわしく、学会のテーマを「宗教改革と近代——多元性・主観性・批判」に設定し、集中的な議論が行われることとなった(<http://www.schleiermacherkongress2017.de/>、2017年3月13日アクセス)。本報告はこの学会についての概略を記すことによって、ドイツにおける最先端のシュライアマハー研究の動向を探ることを目的とする。

【プログラム】

学会は4日に分けて開催された。初日は導入や開会講演が行われ、二日目以降は大会のサブタイトルである多元性(Pluralität)、主観性(Subjektivität)、批判(Kritik)のそれぞれのテーマに一日が割り当てられ、午前は三人の研究者による全体講演、午後は部会に分かれて個人発表が行われた。以下、プログラムを記す。なお翻訳の際、人名は検索の都合上原文のままとした。

3月5日 開会式

挨拶

Thomas Müller-Bahlke(フランク財団・会長), Udo Sträter(マルティン・ルター大学・学長),
Johann Schneider(監督教区長・地域監督), Dirk Evers(神学部・部長)

導入: Jörg Dierken(シュライアマハー協会会長)

開会講演: Udo Di Fabio (ボン)

1. 宗教改革の時代以降における政治と宗教の分離

3月6日 多元性：教派間の差異と宗教的多様性

講演(司会: Sarah Schmidt)

2. Arnulf von Scheliha (ミュンスター):

「したがって、宗教が多数あること、その中でこれ以上ないほどに明確な差異があることを、私はいたるところで必然的で不可避なこととして前提したのである」

——多元性の思想家としてのシュライアマハー

3. Frederek Musall (ハイデルベルク):

対決——ユダヤ教における多元性のチャンスと限界

4. Katajun Amipur (ハンブルク):

「私たちはあなたがたを男と女から創り、民族・部族となした。あなたがたが互いを知るようになるためである」——イスラムの観点からみた宗教と文化の多元性

部会 I: 宗教と社会的秩序

5. Rochus Leonhardt (ライプツィヒ):

国家と宗教——神学史と時代史的にみたシュライアマハーの位置づけ

6. Andreas Arndt (ベルリン):

革命の宗教改革——シュライアマハーによるフランス革命の再解釈

7. Bernd Harbeck-Pingel (フライブルク):

社会的形式における多元性

8. Viktoria Gräbe (ベルリン):

実用にとらわれず、教育的要求をみたま説教

——シャリテでの病院付説教者としてのシュライアマハー(1796-1802)

部会 II: 普遍性と多元性

9. Sarhan Dhouib (カッセル):

多元性・寛容・宗教の自由という(人)権——アラブ近代における改革思想

10. Malte Dominik Krüger (マールブルク):

宗教と諸宗教——像理論的アプローチ

11. Eun Young Hwang (シカゴ):

比較宗教学におけるシュライアマハーの方法論——類型論・進化・キリスト論

12. Simon Gerber (ベルリン):

マールハイネケ・シュライアマハー・宗教改革記念の 1817 年

部会 III: 唯一者にして全一者としての神

13. Christian Polke (ゲッティンゲン):

全(一)性の思想と道——西洋と東洋のあいだにおけるシュライアマハーの神

14. Björn Pecina (ベルリン/ ハレ):

理性と非理性としての倫理

——シュライアマハーとメンデルスゾーンを例としたユダヤ教とキリスト教の観点

15. Friedemann Barniske (ノイエンドッテルザウ):

崇高の宗教としての旧約聖書的一神教——ヘーゲルの宗教史観についての諸考察

16. Constantin Plaul (ハレ):

ディルタイの宗教解釈学における人格主義と汎神論

3月7日 主観性：信仰の内面性と自己関係

講演 (司会: Arnulf von Scheliha)

17. Martin Ohst (ヴッパタール):

ルターとシュライアマハー——プロテスタントにおける多様な主観性思想

18. Jörg Dierken (ハレ):

近代的な(宗教)思想のパラダイムとしての主観性

19. Jochen Hörisch (マンハイム):

シュライアマハーによる主観あるいは主—観(Sub-jekt)

——人間はどのように自己意識的でありえるか、自己意識的であることが許されているか?

部会 I: 観念史的観点における信仰の主観性

20. Claus-Dieter Osthövener (マールブルク):

カントとシュライアマハーについて

21. Henryk Machon (オポーレ、ポーランド):

宗教を規定するのは感情のみか、認知も関わるのか?

——シュライアマハー・ジェイムズ・オットーの見解

22. Peter Schüz (エアランゲン):

宗教の再発見としての宗教改革

——ルドルフ・オットーのシュライアマハー解釈に関連した考察

23. Christine Helmer (エヴァンストン、アメリカ):

シュライアマハーとルター・ルネサンス

24. Sabine Schmidtke (ハイデルベルク):

意志ニオケル運動——メランヒトン・シュライアマハー・主観的な信仰遂行の問い

部会 II: 社会的コミュニケーションと象徴的媒体

25. Jan Rohls (ミュンヘン):

シュライアマハーにおける宗教の媒体としての芸術

26. Emanuela Giacca (ミラノ、イタリア):

倫理・宗教・社交——シュライアマハーの倫理思想の展開からみた主観性

27. Matthew Ryan Robinson (ボン/ケルン):

シュライアマハーと歓待と友情の贖い

28. Holden Kelm (ベルリン):

シュライアマハーによる芸術生産の倫理的有意性

29. Manke Jiang (ベルリン):

啓示—関係における感情——シュライアマハーの哲学的倫理学における

感情概念のコミュニケーション理論的・社会哲学的側面

部会 III: 精神と自然のあいだの個性

30. Elisabeth Hartlieb (マールブルク):

「私の目に映るところではどこでも、女性の本性のほうが高貴に思える」

——時代史的文脈におけるシュライアマハーの性別関係にかんする理解

31. Folkart Wittekind (エッセン):

伝記的所与の反省的自己化としての個性

32. Christian Rebert (ハレ):

倫理を反映するものとしての家族

——社会形式のもつ指導的はたらきの多様性について

33. Anne-Maren Richter (ハンブルク):

シュライアマハーにおける物理学と心理学の失敗の影響

——器官学的(organologisch)な発見的方法(Heuristik)と解釈の機能について

34. Martin Fritz (ノイエンデッテルザウ):

獲得されるべき自己

——実存哲学と実存神学に照らしてみたシュライアマハーの個性観念

3月8日 批判：文化様式と方法論

講演(司会: Jörg Dierken)

35. Sarah Schmidt (ベルリン):

近代のプロジェクトとしての批判

——シュライアマハー的な批判概念の射程とアクチュアリティ

36. Christian Danz (ウィーン、オーストリア):

批判と形成——シュライアマハーとティリッヒのプロテスタンティズム理解

37. Michael Murrmann-Kahl (ウィーン、オーストリア):

数多の神々による永久の闘争——歴史主義による絶対性要求の動揺に関する考察

部会 I: 古代と近代

38. Lutz Käppel (キール):

近代の(新たな)構成としての古代の(再)構成

——プラトンとヘラクレイトスに対するシュライアマハーの取り組み

39. Julia Lamm (ワシントン D.C.、アメリカ):

シュライアマハーの近代的プラトン主義

40. Melanie Obraz (オスナブリュック):

新プラトン主義とのつながりにおけるシュライアマハーの『宗教論』と『美学』

41. Florian Priesemuth (ベルリン / ハレ):

『神学通論』における批判と解釈学

部会 II: シュライアマハーと批判的文献学

42. André Munzinger (キール):

批判と理解——パウロ受容にみるシュライアマハーの解釈学

43. Marianne Schröter (ヴィッテンベルク / ハレ):

シュライアマハーとゼムラーにおける批判の概念

44. Piotr de Bończa Bukowski (クラクフ、ポーランド):

シュライアマハーと原文に対する問い——文献学的・翻訳学的問題について

45. Hermann Patsch (ミュンヘン):

偽パウロからルカの編集者を超えてヨハネの救世主へ

——シュライアマハーにおける文献学と神学的積義

部会 III: 批判的思考の類型と代表例

46. Georg Neugebauer (ライプツィヒ):

批判の理性——初期近代の文化学的・社会学的理論形成に対する所見

47. Omar Brino (ローマ、イタリア):

シュライアマハーとイタリア 20 世紀の宗教哲学

48. Cornelia Ortlieb (エアランゲン):

シュライアマハーとヤコービにおける批判の実践

49. Walt Wyman (ワラワラ、アメリカ):

シュライアマハーの改訂版教義学はどれほど批判的なのか?

——終末論を試験例として

プログラムを概観してみると、発表者の内訳としては、ドイツ国内からの参加者が圧倒的多数を占めていた。しかし少数ではあるが、〈国際〉シュライアマハー学会の名のとおり他国からの参加者も散見され、発表・質疑の言語としてはドイツ語の他に英語も使用が可能であった。ドイツの次に多かったのはアメリカであり、続いてポーランド、イタリア、オーストリアからの研究者も少ないながらも見受けられた(なおこれは所属単位の集計であり、実際の国籍単位の集計とは異なる)。

また研究テーマの観点からいえば、全体としての研究の傾向を掴むことのむずかしさにすぐに突き当たる。簡単にいうと、シュライアマハー研究はテーマの多様化を迎えているといえることができるであろう。KGA(批判版全集)の刊行は集結しておらず未だ進行中であるが、これが進むにしたがって参照が可能になるテキストが増え、研究の領域が多様化する。よって、シュライアマハー研究の動向をいわゆるトレンドや大きな物語といった単一の研究傾向に落とし込むことは困難になってきているといえる。これは逆にいえば、シュライアマハーという思想家が扱っていた領域の広さの証左であるとも言えるであろう。研究に使用されている著作という観点でいえば、やはり『宗教論』が全体の機軸を成しており、『神学通論』や『信仰論』あるいは『弁証法』などが中心になりつつ、分野ごとにさまざまな個別の講義録が参照されているといえることができる。

【講演の内容】

個人発表は個々の部会に分かれて行われたため、ここでは全体講演の内容を簡単に紹介することによって、それぞれのテーマについてどのような議論がなされていたのかを概説することにする。はじめの全体講演は「多元性：教派間の差異と宗教的多様性」という題によって行われたが、この全体講演に限っていえば、焦点は教派間の多様性よりもむしろ宗教的多様性のほうに置かれていたのは結果からして間違いがない。Arnulf von Scheliha (2)は『宗教論』、『信仰論』の著作や『国家論』の講義録を用いて、シュライアマハーの中で諸宗教の分類・特徴・序列などがどのように理解されていたのかを丁寧に説明し、諸宗教の複数性を前提として設定していた多元性の思想家としてシュライアマハーを描きだした。Frederek Musall(3)はユダヤ教研究の立場から、主に 20 世紀におけるユダヤ教の思想家を引用しつつ、ユダヤ教の内部において多元性がどのように理解されてきたのか、また、ユダヤ教正統のラビ Joseph Soloveitchik (1903-1993)による「対決」(‘Confrontation’, *Tradition* 6(2), 1964, pp. 5-29)を参照しつつ、ユダヤ教とキリスト教の対話の困難性などに

についても言及した。また、プログラムに変更があり、代わりに講演を行うことになった **Sarhan Dhouib(9)**はイスラーム研究の観点から、アラブ近代における議論の中において、多元性、寛容、宗教の自由などといったヨーロッパ近代の思想、またキリスト教の宗教改革の思想がどのように受容されたのかに関する発表を行った。このように、多元性をテーマとしたこの全体講演においてはキリスト教・ユダヤ教・イスラームといった一神教内部における諸宗教の多元性がおもに取り上げられ、シュライアマハーだけに問題をとどめることなく、テーマは広い範囲へ広がっていったといえる。

第二回の全体講演は「主観性：信仰の内面性と自己関係」という題において行われた。**Martin Ohst(17)**は大会のテーマにふさわしくルターとシュライアマハーという二人の思想家を取り上げ、それぞれにおける主観性の契機を取り出してその間をつなぐことを試みる。当時のカトリック教会の客観的な救済システムから「信仰のみ」への転換を行ったルターと、一般に「絶対依存の感情」などで知られるシュライアマハーなどという形で対比を行えば、そのあいだにあるつながりは多少なりとも感知できる。二番手の **Jörg Dierken (18)**はシュライアマハー協会の会長も務める研究者であるが、彼はこの主観性という契機を近代思想のパラダイムという形で拡張する。もちろん簡単な一般化は許されないが、例えばカントの超越論的自我や、フィヒテの自我の事行などに代表されるようなドイツ観念論の観点からみて、主観性ないしは自己関係・反省などに代表される概念はその特徴ということが出来るかもしれない。**Jochen Hörisch(19)**はシュライアマハーをさらに掘り下げ、『信仰論』のキーワードにもなる「自己意識」を中心として問題を展開した。

最後の主要講演のタイトルは、近代神学の父であるシュライアマハーにふさわしく「批判：文化様式と方法論」に設定され、討議がなされた。**Sarah Schmidt(35)**は〈批判〉をやはり近代というコンテクストのなかに位置づけ、シュライアマハーが構想した批判がもつ意義を今日という地点にまで広げて考えることを試みた。また **Christian Danz(36)**はシュライアマハーの相方としてティリッヒを設定し、両者のプロテスタンティズム理解を検討することによって、その中に働いている〈批判〉理念の意義を再考した。また、近代におけるこの批判の帰結として生じた歴史主義という問題を **Michael Murrmann-Kahl(37)**は取り上げ、トレルチ、ディルタイにとどまらずさまざまな思想家を参照することでこの問題を概観した。この全体講演のテーマに関していえば、たとえばフェイク・ニュースやポスト・真実などの言葉に代表されるような現実の問題に対して、近代の遺産である〈批判〉がどのような意義を持つのかなどについても論者からは積極的に発言がなされ、近代的枠組み

の射程が改めて確認されたと言えるであろう。

【全体をとおしての所感】

今学会では、「宗教改革と近代」という問題設定がいたるところで有効に機能したといえる。一方でプロテスタンティズムの始祖、500年という節目の年を迎えたルターを据え、他方で(トレルチの区分でいえば)新プロテスタンティズム、近代的プログラムの創始者であるシュライアマハーが学会の主題として固定されており、この二点をつなぐ延長線上にある近代の帰結としての、あるいは近代の途上としての現代を浮かび上がらせるという構図になっていたとすることができるであろう。多元性・主観性・批判というサブタイトルも、その意味ではすべてアクチュアリティにあふれ、選び抜かれたものとなっていた。ユダヤ、イスラームの問題をも射程に入れた多元性セッションや、フェイクニュースなど現実の政治が直面する問題をうまく取り入れた批判セッションなどはその代表といえる。

ただし、もちろん制約があることを承知のうえであるが、多元性セッションにおける副題のひとつとなっていた〈教派間の多元性〉という問題に関しては、もう少し議論が期待できたのではないだろうか。宗教改革記念年を迎えて、ドイツではカトリックとルター派を中心としてエキュメニズムがより意識的に議論されていることを念頭におけば、例えばカトリックの立場から、あるいは改革派の立場からより意識的にシュライアマハーを論じるという試みが用意されてもよかったであろう。その点では、Omar Brino(47)の「シュライアマハーとイタリア 20 世紀の宗教哲学」という報告においてはシュライアマハーをイタリアにおける受容史という別のコンテクストに位置づけることによって、カトリックにかんしても一部触れるところがあった。

また同様に多元性セッションに関してであるが、諸宗教の多様性においてユダヤ・イスラームという対話相手が用意された一方で、同じく伝統的な世界宗教である仏教がその俎上に上ってこなかったのは、アジア人である報告者が惜しいと感じた点である。理由は多々考えられるが、ドイツにおいてアジア人の立場からシュライアマハーを論ずることのできる研究者が多くないという事情が挙げられる。今回の学会を見渡しても、アジア人の参加者は報告者を含め片手で数えるほどであった。アジアの伝統を担ったシュライアマハー研究者のさらなる登場が待たれるところである。

また会場においては、小規模ではあるが、ドイツの老舗出版社である **Mohr Siebeck** と **De Gruyter** の新刊書籍見本市も行われた。シュライアマハー関係の出版物はこの二社によ

ってとくに担われており、本学会での発表者による書籍も多数見受けられた。Mohr Siebeckからはさまざまな叢書からシュライアマハーに関する重厚な研究が何冊も出版され、De Gruyterからはいまだ完結せず刊行中のシュライアマハーの批判版全集(KGA)と、研究書の叢書としてシュライアマハー・アーカイブ(Schleiermacher Archiv)が続々と生産され、KGAを研究の側面からサポートしている。なお、このシュライアマハー学会における講演・発表は毎回一冊の本にまとめられて、この叢書から出版されることになっており、2015年9月に行われた以前のシュライアマハー学会の集成もすでに刊行されている(Arnulf Scheliha / Jörg Dierken (Hrsg.), *Der Mensch und seine Seele: Bildung – Frömmigkeit – Ästhetik. (Akten des Internationalen Kongresses der Schleiermacher-Gesellschaft in Münster, September 2015)*, De Gruyter, 2017)。シュライアマハー研究においては、この二社からの出版物はつねにチェックする必要があるといえるであろう。